

「学制」成立期の小学校・中学校における教育課程の編成に関する基礎的研究(1):
文部省及び東京師範学校の「小学教則」・「中学教則」の分析

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松尾, 由希子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008577

「学制」成立期の小学校・中学校における教育課程の編成に関する基礎的研究（1）

—文部省及び東京師範学校の「小学教則」・「中学教則」の分析—

松尾 由希子（静岡大学 大学教育センター）

はじめに

本稿は「学制」成立期における文部省と東京師範学校の「小学教則」、「中学教則」の詳細を示し、対照を試みることで、当該期の学校に影響を及ぼしたとされる2つの機関がそれぞれ提示した教育課程の特徴、具体的には教授内容及び教授方法について、検討するものである。

「小学教則」「中学教則」とは、今日の学習指導要領にあたり、当時の児童生徒が所属する等級における教科、教授内容、教授方法、教科書、配当時間などをまとめたものである。今日、文部科学省の作成する学習指導要領は、各学校が教育課程を編成する際の基準となっているが、学校が誕生したばかりの「学制」成立期は、基準とすべき教育課程を模索する時期であった。そのため、「学制」成立期は地域でもさまざまな小学教則が作成された。このような経緯に鑑み、そしてこれまでの著者の研究成果から次のような点に関心を寄せる。すなわち、「学制」成立期に作成された地域の小学教則の特徴を見出すことである。というのは、小学教則の習得は近代の学校教員の資質に関わる問題であるからである。例えば花井信氏は、群馬県吾妻郡の教員の履歴書を素材に、近代の学校教員は伝習学校で近代に対応する新しい学問、具体的には小学教則と洋算と洋学を学んだことをあきらかにした¹⁾。さらに、著者・山下廉太郎は群馬県全域に範囲を広げて79名の教員の履歴書を分析した結果、多くの教員が伝習学校または伝習学校設立以前については群馬県から学務専任として文部省へ派遣された金子精一のもとで小学教則と洋算と洋学を学んだことをあきらかにし、近代に必要とされた教員の資質について、近世の学問との連続性をふまえながら検討した²⁾。しかし、近代

の教員が学んだ群馬県の小学教則の具体的な内容についてはあきらかにできず、課題として残すことになった。

これまで、「学制」成立期の小学教則の教育課程に関する研究は文部省³⁾、東京師範学校⁴⁾、地域⁵⁾という各々が作成したものを対象に検討されてきた。まず、各研究の基礎的枠組となっているのが倉澤剛氏の研究⁶⁾である。倉澤氏は文部省と東京師範学校の小学教則について、教授内容及び教授方法ともにアメリカを模範にしたという視点で論証を試みたが、日本近世の教育の影響については論じなかった。学校は近代に入って誕生した教育機関であるため、その教育課程は近世までの教授内容や教授方法と異なるという考え方もできるだろう。しかし、近世の教育を受けてきた「学制」成立期の教育課程の立案者が、教育課程作成時に近世における教育経験を全く反映させなかったとは考えにくい。そのため、当該期の教育課程を検討するうえで、近代以降の外国の影響だけでなく、近世からの継承という面も考慮する必要があるだろう。次に注目するのは水原克敏氏の研究である。水原氏は、文部省の小学教則の教育方法について「読方・口授・暗誦・輪講などの旧来の方法も採用され、新式の教科書と合体させる仕方で規定された。当時の啓蒙的な翻訳書と伝統的教育方法が、当面对処すべき小学教則とされたのであった」⁷⁾というように、教授内容は近代以降に日本に入ってきた外国の学問だったと述べる一方で、教授方法は近世以来の方法を踏襲していたと示唆する。しかし、その示唆は教科名をあげるという抽象的な言及に留まっている。

そこで、本稿では、近世からの継承と近代以降の外国からの摂取という観点で「学制」成立期の教育課程、特に教授内容及び教授方法について具

体的に検討する。課題を検討するための主な資料として、文部省については明治5年(1872)の小学教則及び中学教則⁸⁾と明治6年(1873)の小学教則⁹⁾を、東京師範学校については明治6年2月と同年5月と明治7年(1874)1月の小学教則¹⁰⁾を用いる。これらの資料について、教授内容や教授方法に着目して整理し、改正の際の変更部分を含めて分析する。そのうえで2つの機関の小学教則を対照し、それぞれの特徴について先行研究に考察を付け加えたい。なお、本稿にて時期区分の際に使用する「学制」成立期とは、明治5年から明治7年までとする。明治5年は文部省による初めての小学教則が公布された年であり、明治7年は東京師範学校による2度目の小学教則改正が行われた年である。

1 文部省の小学教則及び中学教則にみる教育課程

(1) 文部省の小学教則の構造

文部省は、「学制」発布の翌月である明治5年9月8日に文部省布達番外で小学教則を公布した。小学教則は、小学校における教育課程(教科の配当時間、教科、教科書)、教授方法の概要を示したものである。明治5年の小学教則の第1章及び第2章や明治6年の小学教則の凡例に教育課程の構造が示されている。それによると上下2等にわけた小学を、さらにそれぞれ8級に分けた。毎級の学習期間は6ヶ月で、第8級から始まり、第1級に至る。在学期間については、下等は6から9歳、上級は10から13歳であり、上下合わせて8年とした。なお、進級試験で落第した場合は、再びその級に6ヶ月とどまることになる。下等小学の卒業生は試験を経て上等小学へ進学し、上等小学の卒業生は試験を経て中学校へ進学するというように、進学ルートが示された。以降、下等小学教則と上等小学教則にわけて、その特徴を示す。

(2) 文部省の2つの下等小学教則

①明治5年の下等小学教則

明治5年下等小学教則の等級ごとに置かれた教科、週ごとの配当時間、教授内容、教授方法、教科書について、巻末表1に整理した。

教科として、「綴字」「習字」「単語読方」「単語諳誦」「単語読取」「洋法算術、算術」「修身口授」「会話読方」「読本読方」「会話諳誦」「地学読方」「養生口授」「会話読取」「読本輪講」「文法」¹¹⁾「地学輪講」「理学輪講」「書牘」「各科温習」の19種を置いた。以降、教科について述べる際は、教授方法などと区別するために、「習字」のように括弧付で表記する。全ての等級に置かれた教科は「洋法算術、算術」と「習字」のみである。「綴字」「単語読方」は第8級や第7級に置かれるがそれ以降は置かれぬ。一方で、「地学輪講」「理学輪講」「書牘」は第3級以降に置かれる教科である。輪講は「7、8人、多くて10人程度の生徒が1グループとなり、その日の順番を籤などで決め、前から指定されていたテキストの当該箇所を読んで、講義をする。その後、他の者がその読みや講述について疑問をだしたり、問題点を質問したりする。講者はそれらに答え、積極的な討論を行う。これを順次、講義する箇所と人を代えて繰り返していく」¹²⁾のものであり、かんたんな読み書きができるだけでは対応できない高度な内容であったため、上位の等級に置いたものと考えられる。「書牘」は手紙などを書く授業であり、それまでの等級に置かれた「綴字」「習字」などで文字を習得してから、学ぶようにした。

教授内容は、読むこと、書くこと、算術、字(数字、平仮名、片仮名)、品詞の活用、地理、理科などである。近世以来の伝統的な内容と近代の新しい学問である洋法算術、世界地理(「地学輪講」)、理科(「理学輪講」「読本読方」「読本輪講」「書牘」の教科書の内容¹³⁾)、保健(「養生口授」)などで構成された。明治5年の小学教則の一部の教科は、教授方法から名づけられたことから、教授方法そのものを教授内容としても重視していたことがうかがえる。教授法から名づけられた教科を具体的にあげると「綴字」「習字」「単語読方」「会話読方」「会話読取」「会話諳誦」「修身口授」「地学輪講」

「理学輪講」などである。

教授方法は、主に書くこと、読むこと、教員の講述などのいわゆる一斉教授、予習・復習を前提とした授業、教科書の使用、などがあつた。読み書きについては、特に詳細に記されている。書くことについては、例えば「習字」の第8級では字形、運筆を教え、第4級では字形は小さく書くように指導するとある。ただ書くだけでなく、「単語書取」の第6級では聞き書きという方法もとつた。その他に「書牘」という手紙を書くための教科もあり、書くという教授方法は多岐にわたって用いられている。読むことについても、暗誦、独見、口に出して読むというようにさまざまな方法が指定されており、「算術」「単語読方」「単語諳誦」「会話諳誦」など、複数の教科で実施されていた。このように、読むことや書くことは、上記したように教授内容であると同時に教授方法としても下等小学教則の中で重要な位置づけにあつたと考えられる。近代に入って一気に広まった一斉教授¹⁴⁾も示された。また、授業時間以外の予習・復習を前提とした授業もあつた。例えば、「会話諳誦」の第5級では学んでいない教科書の部分を授業の前までに一人で読んでおくことや「読本輪講」の第4級ではすでに学んだ箇所を暗誦させることとあり、児童の予習・復習をふまえて授業を行なおうとした。このようにさまざまな教授方法がみられる一方で、「前級ノ如シ」という文言や他の教科と同様の方法で教授するという記述（「会話読方」第7級など）もしばしばみられることから、教授方法は教科や生徒の発達段階に十分に対応していたとはいえない。

② 明治6年の下等小学教則

明治6年下等小学教則の等級ごとに置かれた教科、週ごとの学習時間、教授内容、教授方法、教科書について、巻末表2に整理した。

明治6年に改正された下等小学教則と明治5年の下等小学教則を対照すると、主な変更箇所は4点である。1つは、教科名の変更である。「算術」について、明治5年は、第8級のみ「洋法算術」とし、他の等級は「算術」という教科名であつた。

明治6年では、第8級も「算術」とし、「洋法ヲ主トスル」という説明を追加した。また、明治5年の「理学輪講」は「物理学輪講」に、「地学輪講」は「地理輪講」に、「地学読方」は「地理読方」に変わった。2つは、科目の追加である。「国体学口授」という教科が増えた。3つは、「習字」の第8級の教科書である。明治5年では『手習草紙』『習字初歩』『習字本』の3点をあげたが、明治6年では『習字本』を除外し、2点にした。4つは、授業数の減少である。文部省は明治6年3月に学校休業日の変更を府県へ達したため¹⁵⁾、週30時間だった授業は週20時間に減つた。結果、明治6年の小学教則では「綴字」「習字」「算術」などの科目で授業時間数が減少した。

(3) 文部省の2つの上等小学教則

① 明治5年の上等小学教則

明治5年上等小学教則の等級ごとに置かれた教科、週ごとの学習時間、教授内容、教授方法、教科書類（掛図や教具含）について、巻末表3に整理した。

教科として、「細字習字」「算術」「読本輪講」「理学輪講」「文法」¹⁶⁾「書牘、書牘作文」「地学輪講」「史学輪講」「細字速写」「罨画」「幾何」「博物」「化学」「生理」「諸科温習」の15種が置かれた。上等小学教則で新たに置かれた教科は、「細字習字」「史学輪講」「細字速写」「罨画」「幾何」「博物」「化学」「生理」の8種である。下等小学教則よりさらに理科の割合が高くなった。全ての等級に置かれた教科は「算術」「読本輪講」「理学輪講」「地学輪講」である。下等小学教則における「輪講」は、主に第3級以降の上位の等級で行なわれていたが、上等小学教則ではそれを引き継ぐように、第8級から第1級まで一貫して輪講を置いた。輪講は、教授方法であるが教科名として名づけられ、毎級に置かれたことから上等小学教則において重視されていたと考えられる。上等小学教則は下等小学教則に比べ教科数が減つたことで、等級に関わらず同じ教科で学び続けることも多くなり、1つの教科を系統的に学べるようになった。

教授内容は、字（楷書片仮名交じり文、行書平仮名など）、手紙や公用文（「細字習字」「書牘、書牘作文」）、歴史（「史学輪講」）、地理（「地学輪講」「野画」¹⁷⁾）、数学（「算術」「幾何」）、理科（「博物」「化学」「理学輪講」）、保健（「生理」）、体操である。下等小学教則に比べると、理科や数学の内容が増えている。また、書くことに関わる内容が多いため、下等小学教則同様に書くことを重視していたことがうかがえる。

主な教授方法は、1.輪講、2.教科書や掛図などの使用だった。まず、輪講から説明する。輪講では、常に児童に「独見」、いわゆる授業の前までに指定された教科書を一人で読んでくるという予習を課していた。下等小学教則でも予習・復習を課していたが、上等小学教則では輪講の教科数の増加などによって、これまで以上に予習を求められるようになった。小学教則で置かれた輪講は、すでに近世の藩校・郷学で「会読」として行なわれていたものである。前田勉氏は『学制』発布時点では、たしかに儒学や国学のような『実なき学問』は批判されたが、会読＝輪講という学び方は否定されてはいなかったという点である¹⁸⁾と述べ、近代の学校教育でも近世以来の教授方法が評価されていたことを指摘する。近世において「会読」は、素読を終了した同程度の学力をもつ上級者が行なうものだった¹⁹⁾。次に掛図などの使用である。掛図や教具の使用は、下等小学教則中で特に記されなかったが、上等小学教則では教科書に加えて指定されるようになった。「地理輪講」「物理学輪講」「化学」という理科や地理の教科では、教科書以外に器械や地図を使い、具体的かつ実証的に学ぶことになった。「体操」でも図を用いた。

②明治6年の上等小学教則

明治5年の上等小学教則との変更点は、授業時間数の変更である。明治6年の下等小学教則同様、総授業時間数の減少に伴い、「読本輪講」「理学輪講」「地学輪講」「算術」「史学輪講」「書牘、書牘作文」「幾何」「博物」「化学」の教科²⁰⁾で授業時間数が減少した。

(4) 文部省の明治5年の中学教則

「学制」において、中学校は大学と小学の間の学校と定められた。したがって、小学校の卒業生が試験を経て中学校に進学するという学校体系であったが、210の小学校に対して中学校は1校であったため実際の進学者は限られていた²¹⁾。

① 中学教則の構造

明治5年9月8日に小学教則とともに「中学教則略」が公布された。上下2等に分けた中学を、さらにそれぞれ6級に分けた。毎級の学習期間は6ヶ月で、第6級から始まり、第1級に至る。在学期間は14から19歳であり、上下合わせて6年とした。進級試験で落第した場合は、その級に留まることになる。中学の卒業試験を経て大学へ進学すると記され、中学は大学への連絡機関であることが示された。中学教則は、これ以降改正されず、明治11年（1878）5月に廃止された。

② 明治5年の下等中学教則と上等中学教則

中学教則は、小学教則と異なり、教科名はあげられているが教授内容や教科書はほとんど示されなかった。「学制」成立期において、文部省は小学校を優先する方針をとった²²⁾ため、中学校を置いたものの、その教育課程は後回しになっていた。この状況はしばらく変わらず、明治7年の『文部省年報』では中学の設備不足、確立されていない教育方法、少ない生徒数が指摘され²³⁾、明治10年（1877）になっても、公立中学の設備の乏しさが指摘され続けた²⁴⁾。

下等中学教則の教科は、「国語」「数学」「習字」「外国語」「地学」「史学」「幾何学」「窮理学」「化学」「政体大意」「生理学」「国勢学大意」「代数学」「博物学」「修身学」の15種である。小学教則と異なり、教授方法が教科名に入ることはなくなった。全ての等級に置かれているのは、「国語」「数学」「習字」「外国語」「地学」「史学」「幾何学」「窮理学」「化学」の9種である。国語（「国語」「習字」）、理科（「博物学」「化学」「窮理学」）、数学（「数学」「代数学」「幾何学」）を主にしながら、歴史（「史学」）、地理（「地学」）、習字の教科書、保健（「生理学」）や修身なども入っている。教授内容は、「習

字」の第6級のみ「書牘、作文」と記されている。教科書は、「習字」に『国尽』と『記簿法』を、「国語」に『古言』を指定した。

上等中学教則の教科は、「国語」「習字」「外国語」「幾何学」「窮理学」「化学」「代数学」「修身学」「動物学」「測量」「経済学」「博物学」「金石学」「重学」「地質学」「性理学」「星学」の17種である。「動物学」や「地質学」など理科系の教科が増え、「経済学」や「星学」も加わった。全ての等級に置かれているのは「習字」「外国語」「代数」「幾何学」「修身学」「測量」「経済学」である。教授内容は、「重学」「星学」で「大意」と記されたのみであり、中学教則から詳細な教授内容を把握することはできない。教科書は、下等中学教則と同様に「国語」では『古言』、「習字」では『国尽』『記簿法』と定めたのみだった。

以上のように、小学教則と比べると教授内容や教授方法に関する記述は乏しく、「学制」成立期における中等教育機関の教育課程編成は不十分な状態にあったといえる。

2 東京師範学校の小学教則にみる教育課程

(1) 東京師範学校の小学教則の成り立ちとその評価

『文部省第一年報』²⁵⁾によると、東京師範学校は明治5年9月に諸葛信澄を校長とし、アメリカ人のスコットを教員として招へいして、教則を作成した。使用する教科書がなかったため、11月に師範学校内に編輯局を置いて、教科書を編輯することになった。明治6年2月に下等小学教則<以降、6年2月の教則(下)という。>を、同年5月に上等小学教則<以降、6年5月の教則(上)という。>を初めて定めた。上等小学を定めると同時に下等小学教則も改正した<以降、6年5月の教則(下)という。>。また、明治7年1月にも下等小学教則<以降、7年の教則(下)という。>は改正された。

東京師範学校の小学教則はアメリカの小学校の教則をそのまま翻訳したものといわれるが²⁶⁾、東

京師範学校の小学教則は公立小学校への影響という点で評価されている。府県の多くは、文部省の小学教則ではなく、東京師範学校の小学教則をモデルに採用したといわれる²⁷⁾。ただし、この点について管見する事例をもとに説明をつけ加えると、「学制」成立期において各府県が小学教則を作成する際に、まずモデルにしたのは文部省だった。しかし、各府県は小学教則を改正する際に、文部省から東京師範学校の小学教則にモデルを変えている。例えば、滋賀県の明治7年、同8年(1875)、同10年の小学教則をあげたい。明治7年の滋賀県の小学教則は、明治6年5月に公布された文部省の小学教則と多くの類似点を持つ²⁸⁾が、その後改正された明治8年と同10年の同県の小学教則は、東京師範学校の小学教則に大きな影響を受けていた²⁹⁾。岡山県についても明治6年の小学教則(旧北条県)は文部省の小学教則をもとにしたが、改正された明治8年の小学教則(旧岡山県)は東京師範学校の小学教則をもとにしたようである³⁰⁾。つまり、「学制」公布から年を経るにつれて、文部省の小学教則よりも東京師範学校の小学教則の影響力が強くなっていくと考えられる。その要因の1つに、東京師範学校の卒業生の存在があった。東京師範学校の卒業生は「全国の師範学校に配置され、各府県の教育に関する最高指導者の地位について、師範学校の教則と師範学校編の教科書を普及させるのに力があつた」³¹⁾とされ、初めての卒業生を明治6年7月に送り出してから、各府県における東京師範学校の影響力は強くなっていった。

(2) 東京師範学校の小学教則の構造

6年2月の教則(下)と6年5月の教則(上)の凡例によると、上下2等に分けた小学を、さらにそれぞれ8級に分けた。毎級の学習期間は6ヶ月で、第8級から始まり第1級に至る。在学期間について、下等は6から9歳、上等は10から13歳であり、上下合わせて8年間とした。なお、進級試験に落第した場合、その級にとどまることになる。6年5月の教則(下)及び6年5月の教則

(上)により、下等小学の卒業生は試験を経て上等小学へ進学し、上等小学の卒業生は試験を経て中学に進学するというように進学ルートが示された。このように、東京師範学校の小学教則は、文部省の小学教則と同様の構造であった。

(3) 東京師範学校の3つの下等小学教則

①明治6年2月下等小学教則

6年2月の教則(下)の等級ごとに置かれた教科、教授内容、教授方法、教科書類(掛図や教具含)について、巻末表4に整理した。

教科として、「読物」「算術」「習字」「書取」「問答」「作文」「諸科復習」「復読」「体操」の9種を置いた。全ての等級に置かれたのは「読物」「算術」「習字」「問答」「体操」の5種である。「書取」は第8級から第3級まで置かれ、「作文」は第3級以降に置かれることから、ある程度の単語を習得したうえで「作文」を学ぶという学習過程になっていた。等級によって教科を変えることはほとんどなく、1つの教科の内容を長い期間をかけて習得させることにした。

主な教授内容は、書くこと(筆の持ち方、「習字」、「書取」、「作文」)、字(片仮名、平仮名、草書、楷書、数字)、算術、問答(「問答」)、地理(「問答」の教科書)、理科(「問答」や「読物」の教科書)、体操などである。このように、「問答」の中で地理や理科を教えることにした。文部省の下等小学教則と同様に、一部の教科名は「書取」「問答」「作文」というように、教授方法から名づけられていることから、教授内容としても重視していたことがうかがえる。

主な教授方法に、教科書や掛図・教具の使用、書くこと、問答、暗誦があった。教科書は「作文」以外の教科で使われ、掛図・教具として「五十音図」、「数字図」、日本地図、万国地図、算盤、石盤が使われた。書くことは、「習字」「書取」「作文」の中で行なわれた。問答は「問答」の教科で、日本地図や掛図、教科書を使いながら行なった。暗誦は「算術」の中で、九九や加算を学ぶ際に用いた。教授方法は、等級ではなく教科ごとに定型化

する傾向にあり、児童の習熟度には対応していなかった。また、「習字本ニテ楷書ヲ授ク」(「習字」第3級)、「小学算術書巻ノ四ヲ以テ除法ヲ授ク」(「習字」第4級)というように、教科書の使用のみを教授方法とすることも多く、教授方法は多様とはいえない。

②明治6年5月の小学教則

6年5月の教則(下)の等級ごとに置かれた教科、週ごとの配当時間、教授内容、教授方法、教科書類(掛図や教具含)について、巻末表5に整理した。

教科として「読物」「算術」「習字」「書取」「問答」「作文」「諸科復習」「復読」「体操」の9種を置いた。6年2月の教則(下)と対照したところ、教科の変更はない。

教科の内容や数は6年2月の教則(下)と変わらないが、<教授内容>と<教授方法>の変化を確認できる。教科ごとに変更点をあげる。「読物」では、第8級で「連語図(第1~第8)」が追加され、「単語図(第1~第8)」を使って教えてきた単語の読み方と名物の内容が削除された。第7級で掛図の「連語図」を削除し、代わりに6年2月の教則(下)の第6級にあった『小学読本(巻2)』を置いた。つまり、『小学読本』及び『地理初歩』を使用する等級が繰り下がったことになる。また、教科書の一部は変更された。

「算術」の教授内容として、第7級にローマ数字を加えた。また、第1級の「分数」について、6年2月の教則(下)は「分数」のみだったが、6年5月の教則(下)では「容易キ分数」と記された。教授方法について、6年2月の教則(下)と比べると第6級で詳しく説明されるようになった。例えば、6年2月の教則(下)の第6級は「小学算術書巻ノ一ヲ以テ加法ヲ授ク」とかんたんに記されたが、6年5月の教則(下)では「加法ヲ授ク最初ハ小学算術書を用キテ誦算ヲ主トス下ニ倣ヘ」と詳細になった。6年2月の教則(下)と同様に、教科書として『小学算術書』をあげたが、教科書の巻数は記されなくなった。

「習字」について、6年2月の教則(下)の第

4級の教授内容は「草書」だったが、6年5月の教則（下）では「行書」になった。6年2月の教則（下）では楷書の次に草書を学んだが、6年5月の教則（下）では楷書と草書の間に行書をいれて、楷書、行書、草書という学習過程を示した。他に、掛図が変更になった。6年2月の教則（下）の第8級では「習字図」を用いたが、6年5月の教則（下）では削除された。

「書取」について、6年2月の教則（下）では第8級から第3級まで置かれていたが、6年5月の教則（下）では第8級から第6級に置かれることになった。それは教授内容の等級繰り下げを行なったためである。6年2月の教則（下）では第8級から第3級までの6つの等級期間（第8級から第3級）で学んだ内容を、6年5月の教則（下）では3つの等級期間（第8級から第6級）で学ばせることにした。

「問答」について、6年2月の教則（下）では第4級以降に地理の内容を置いたが、6年5月の教則（下）は第6級以降に置いた。教授方法として、6年2月の教則（下）では第4級以降に地球儀を使ったが、6年5月の教則（下）では第5級に繰り下げられた。それに伴い、「暗射地図」なども等級を繰り下げて使用することになり、第1級で「博物図」が加わった。教科書は、『日本史畧』『日本地畧』などに変更したが、「読物」と「問答」で同じ教科書を用いるという方針は継承された。

「作文」について、6年2月の教則（下）では第3級から第1級に置かれたが、6年5月の教則（下）では第5級から第1級に置かれた。教授方法を対照すると、等級繰り下げになっていることがわかる。例えば、6年5月の教則（下）の第5級の教授方法は、6年2月の教則（下）の第3級及び第2級の教授方法と同じものである。また、予習を前提とした授業はなくなった。6年2月の教則（下）の第3級では、「単語中ノ一文字ヲ題ニ与ヘテ一句ニ綴ラシム但シ前日題ヲ与ヘテ翌日認メ来ラシム……」とあるように、第3級の課題について前日に与えた題を使って翌日書かせて来るといように予習を求めていたが、6年5月の

教則（下）では予習に関する文言はなくなった。また、6年5月の教則（下）の第1級に「容易キ手紙ノ文ヲ綴ラシム」とあるように「容易キ」という文言が追加された。

「諸科復習」「体操」について、6年2月の教則（下）では教授方法が記されなかったが、6年5月の教則（下）では「従前学フ所ノモノヲ挙ケテ復習セシム」（「諸科復習」）、「体操図ニ依テ授ク以下之ニ倣フ」と記された。

以上のように、6年2月の教則（下）と6年5月の教則（下）を対照したところ、教科名の変更は無いが、複数の教科で教授内容の等級繰り下げが行なわれた結果、6年2月の教則（下）に比べて6年5月の教則（下）の学習内容は高度になったといえる。「書取」の時間が減った代わりに「作文」の時間が増えているのも、学習内容が高度になったことを示している。また、「算術」「諸科復習」「体操」において教授方法を詳しく説明するようになり、6年2月の教則（下）に比べると充実したといえよう。

③明治7年の下等小学教則

7年の教則（下）の等級ごとに置かれた教科、教授内容、教授方法、教科書類（掛図や教具含）について、巻末表6に整理した。

教科は、これまでの2つの教則と変わらず「読物」「算術」「習字」「書取」「問答」「作文」「諸科復習」「復読」「体操」の9種である。6年5月の教則（下）と7年の教則（下）を対照すると、主な変更点は3点である。

1つは、「読物」の第3級から第1級における一部の教科書の等級繰り下げである。例えば、6年5月の教則（下）の第1級で使われていた『万国地誌略（巻1）』が、7年の教則（下）では第2級で使われるようになった。2つは、「算術」の教授内容の等級繰り下げである。6年5月の教則（下）の教授内容「容易キ分数」について、7年の教則（下）では第2級で学ぶことになった。3つは、「習字」の第3級の内容である。6年5月の教則（下）の第3級では草書を学ぶことになっているが、7年の教則（下）では第4級から継続して第

3級でも行書を学ぶことになった。

6年5月の教則（下）は、6年2月の教則（下）と比べて全体的に教授内容の等級を繰り下げた結果、学習内容は高度になったが、7年の教則（下）でも同様に「読物」と「算術」の一部の等級について教授内容を繰り下げた結果、さらに高度な学習内容になった。

（4）明治6年5月の上等小学教則

6年5月の教則（上）の等級ごとに置かれた教科、週ごとの学習時間、教授内容、教授方法、教科書類（掛図や教具含）について、巻末表7に整理した。

教科は、「読物」「算術」「習字」「輪講」「語記」「作文」「野画」「諸科復習」「体操」の9種を置いた。下等小学教則の教科と対照させると、「輪講」「語記」「野画」を加え、「書取」「作文」「問答」がなくなった。

主な教授内容は、書くこと（「習字」「作文」）、算術、地理（「読物」の教科書）、歴史（「読物」の教科書）、理科（「読物」の教科書）、修身（「読物」の教科書）、体操である。下等小学教則と比べると、「読物」で用いられる教科書の内容が多岐にわたっているため、教授内容も多くなった。理科の内容の種類が増え、修身も新たに加わった。

教授方法はほとんど記されていないが、その中で「習字」の第4級には「草書細字ヲ早写セシム但手本ヲ与ヘスシテ教師口述ス」とあり、「作文」の第7級についても「問題ヲ出シテ答ヘテ文ニ綴ラシム」と記されている。このように、教授方法をほとんど示さない上等小学教則の中でも、書く教科についてはある程度詳しく示しており、書くことの重視がうかがえる。一方で、文部省の小学教則で重視されていた「輪講」については、凡例に「其級ニ於テ学ヒタル書籍ヲ用フ依テ別ニ書名ヲ掲ケス」と、その級で用いる教科書を使うという指示のみだった。教科書は「読物」のみで指定されたにすぎなかったため、選択肢はほとんどなかったといえる。

このように上等小学教則は、下等小学教則に比

べると入念に作られたとは考えにくく、「学制」成立期において、東京師範学校も下等小学の教育課程の充実を優先させたことはあきらかだった。

3 文部省と東京師範学校の小学教則の共通点と差異

文部省は東京師範学校を実践研究の場として活用し、東京師範学校によりよい小学教則を考案させようとした³²⁾。その目的は、文部省及び東京師範学校の小学教則を各府県の小学教則のモデルにすることにあつた³³⁾。実際、明治6年の文部省の小学教則の第2章には「……今其毎級課業授ケ方ノ一例ヲ挙テ左ニ示ス尤一般必行ノモノニハ非スト雖ドモ各其地其境ニ随ヒ能ク之ヲ斟酌シテ活用ノ方ヲ求ムヘシ」³⁴⁾とあり、文部省の小学教則に書かれている課題（教授内容や教授方法）は必ず実行しなければいけないというものではなく、地域の事情に合わせて文部省の小学教則を活用するようにと述べる。そして、明治10年になると「曩時各府県ニ於テ制定スル所ノ教則学期等ハ率ネ皆官立師範学校ニ準拠シ……」³⁵⁾とあるように、各府県の小学教則は師範学校の小学教則をもとに作成されるようになっていた。

本節では、「学制」成立期において文部省がまず充実させたいと考えていた小学の中でも下等小学教則を対象に分析する。具体的には、文部省の明治6年の下等小学教則（以降本節では、文部省の小学教則という。）と東京師範学校の明治7年1月の下等小学教則（以降本節では、師範学校の小学教則という。）を題材に、（1）教科と教授内容、（2）教授方法の2点を対照することで、2つの機関の小学教則の特徴をあきらかにする。

（1）教科と教授内容

両者の小学教則の主な共通点は2点である。1つは、教授内容の編成である。主に読み書き算という近世以来の学びと地理（欧米の地理など）や理科（窮理学、博物など）という新しい近代の学問によって構成されていた。読むことについて、

文部省の小学教則では「単語読方」や「会話読方」という教科を置き、教科書を通じて語句の読みや意味を学ばせるようにした。師範学校の小学教則でも「読物」の中で単語の読み方を学ばせた。書くことについて、文部省の小学教則では「習字」「綴字」「書牘」「単語書取」など複数の教科を置いて、平仮名や数字などの字、単語、手紙文を学ばせるようにした。師範学校の小学教則では「習字」「書取」「作文」の教科で、文字（楷書、行書、草書）や手紙文などの内容を学ばせるようにした。「算術」は両者の小学教則とも全等級に置き、四則などの計算、分数、筆算、暗算を学ばせた。理科については、文部省の小学教則における教科書の内容や教科別配当時間より、特に理科を重視したといわれる³⁶⁾。また、師範学校の小学教則では、「問答」や「読物」の教科書（『小学読本』³⁷⁾）に理科の内容を含んだ。地理について、文部省の小学教則では「地理輪講」「地理読方」の教科を置き、『日本国尽』『世界国尽』という教科書を使って学んだ。師範学校の小学教則では「問答」や「読物」の教科書に、日本地理（『日本地誌畧』）や世界地理（『万国地誌畧』）の内容を含んだ。2つは、教授方法から名づけられた教科名にある。特に文部省の小学教則に多くにみられる。師範学校の小学教則でも「問答」「読物」「書取」などを教科名としてあげた。このことは「どのように学ぶか」という教授方法そのものを教授内容としても重視したためと考えられる。

両者の小学教則の主な違いは、2点である。1つは、「体操」と修身と養生と歴史という4つの教授内容にある。上記したように、両者の小学教則は教科と教授内容について類似した編成をとるが、この4つのみ異なる。文部省の小学教則のみに修身（「修身口授」）と養生（「養生口授」）の教科を置き、師範学校の小学教則のみに「体操」を置き、「問答」と「読物」で用いられる教科書（「万国史畧」「日本史畧」）を通じて歴史（欧米史と日本史）を学ばせた。2つは、1つの教科における学習内容の系統性である。文部省の小学教則は19の教科がありながら、全等級に置いた教科は「習

字」「算術」のみであり、等級によって教科を変える傾向にあった。一方で、師範学校の小学教則ではほとんどの教科が全等級を通じて学ぶものになり、教科における学習内容の系統性が明確になった。

(2) 教授方法

両者の小学教則の主な共通点は2点である。1つは、書くことである。書くことに関わる教科や詳細な教授方法の記述が多く、書くという教授方法を重視していることがわかる。2つは、教科書の使用である。さまざまな教科で教科書が用いられ、その内容を児童に習得させようとした。

両者の小学教則の主な違いは、4点である。1つは、掛図や教具の使用である。師範学校の小学教則では「読物」「問答」「体操」の教科で、図や地図や地球儀を用いるように示した。一方で、文部省の小学教則では掛図や教具の使用は示されず、「地理輪講」で日本地図や世界地図の用法を教える際も地図を使うことは無かった。2つは、教科をまたがった教科書の使用である。師範学校の小学教則では、同じ等級の「読物」と「問答」において同じ教科書を使用した。例えば、第5級では、「読物」の時間に『日本地誌畧』の内容（日本地理）について地図を使って学ぶ。さらに「問答」の時間では、『日本地誌畧』と地図と地球儀を使いながら問答する。このように教科書の内容を教授した後に問答を行なうことで、学習内容の定着をはかったものと考えられる。3つは、授業時間外の予習・復習を前提とした授業である。師範学校の小学教則にはみられないが³⁸⁾、文部省の小学教則の「読本輪講」「地理輪講」「会話誦誦」に予習・復習を前提とした授業を確認できる。例えば、「会話誦誦」の第5級では「……未タ学ハザル所ヲ独見シ来テ誦誦セシム」とあり、まだ学んでいない教科書の箇所を事前に一人で読ませてきて、授業でそれを暗誦させた。また、「読本輪講」の第4級では「既ニ学ヒシ所ヲ誦誦シ来リ一人ツヽ直立シ所ヲ変ヘテ其意義ヲ講述ス」とあり、学んだところを暗誦させてきて、授業では一人ずつ順番に

その意味を「講述」させた。4つは、輪講と問答という2つの教授方法である。文部省の小学教則では、上位の等級に複数の輪講の教科を置いた。一方で師範学校の小学教則では、全等級に「問答」を置いた。このように、輪講と問答はそれぞれの小学教則で重視されていた教授内容かつ教授方法であったといえる³⁹⁾。問答は、アメリカの小学校教則から導入したものであり⁴⁰⁾、教員の問いに対して児童が適切に回答するものであり、習得した知識を確認することができた。一方で、輪講は授業前に教科書を予習したうえで、一人ずつ「講述」していくものだった。輪講は、これまで学んだ知識を組み合わせる論理的な説明や主張をするという点で児童にとって、問答よりもさらに高度な学習内容（学習方法）だったと考えられる。

以上、2つの小学教則にみる共通点と違いをあげてきた。先行研究では、倉澤剛氏が文部省の小学教則と東京師範学校の小学教則(明治6年2月)を対照させた結果、東京師範学校では①国語に関する教科が「著しく整とんされ、一般に親しみ易いもの」になった、②さまざまな教授内容を「問答」という1つの教科にまとめ「すっきりした構成」になった、③道徳の教科(「修身口授」)がなくなり「知識主義一辺倒のカリキュラム」になった、④児童用の教科書と掛図が初めて作られ、小学教則にもりこまれたため「教則は始めて児童の実態に近づいてきた」と述べ、東京師範学校の小学教則を評価した⁴¹⁾。このような倉澤氏の評価に対して、本稿では以下の考察を付け加えたい。

まず、両者の小学教則の共通点である。主な教授内容の編成についてはほぼ共有していた。教授内容について、体操と歴史は師範学校のみで学び、養生や修身は文部省のみで学ぶというように若干の違いはみられるものの、近世以来の伝統的な読み書き算と近代の新しい知識である理科や地理で構成される教授内容に大きな違いはなかった。両者の小学教則の大きな違いは、教授方法にあると考える。端的にいうと、文部省の小学教則に比べて、東京師範学校の小学教則は掛図の利用など児童の発達段階を考慮した教授方法を採用し、複数

の教科に共通する教科書を使用し、児童に授業外の子習・復習を課さないなどの点から、教員も児童も取り組みやすいものであったと推測できる。一方で、文部省の小学教則は、江戸時代の教授方法を多分に継承していた。具体的に、「単語読方」の第8級の教授方法を示そう。「童蒙必読単語篇等ヲ授ケ兼テ其語ヲ盤上ニ記シ訓読ヲ高唱シ生徒一同之ニ準誦セシメ而シテ後其意義ヲ授ク但日々前日ノ分ヲ誦シ来ラシム」とあるように、児童は言葉の意味をわからなくてもとりあえず教員の後に続いて教科書の文を声に出して読み、その後意味が教えられた。また、前日の分の暗誦を日々義務づけられた。この学習過程は、洋学や国学にも適用されていたといわれる漢学の学習方法の1つである素読と重なる⁴²⁾。また、文部省の小学教則では、教員が児童に教科書の内容を「講述」という方法をとるが、これも近世の漢学塾などで「先生が生徒たちの前で、経書の一章、あるいは一節ずつを講解して聴かせる、口頭で行われた一斉授業」⁴³⁾と重なる教授方法である。輪講についてもすでに1節で述べたとおり、特に藩校や郷学や漢学塾などで行なわれていた教授方法だった。なぜ、近世の教授方法が近代の小学教則で採用されたのか。文部省の小学教則を起草したのは洋学者たちだったといわれる⁴⁴⁾。近世で漢学を学び、さらに輪講(近世では「会読」)や素読を通じて洋学を習得した小学教則の起草者たちが、同じように近世以来の教授方法を用いて児童に新しい知識を教授しようとしたことは想像に難くない。しかし、近世において藩校や漢学塾や洋学塾で学べた人々はごく一部であった。そのため、文部省の小学教則が採用した教授方法は、多くの児童にとってまた一部の教員にとってもなじみのないものであり、高度な方法として敬遠される可能性を有していたとも考えられる。ただし、このような特徴をもつ文部省の小学教則は否定されるものではなく、1つの小学教則のモデルとして、師範学校の小学教則とともに各府県に提示され、採用する府県も存在した。

おわりに

本稿は、「学制」成立期の学校の教育課程に影響を及ぼしたといわれる文部省と東京師範学校が作成した教則の教授内容及び教授方法について、近世からの継承と近代以降の外国からの摂取という観点から、詳細に検討したものである。

文部省は、明治5年「学制」発布の翌月に小学教則と中学教則を公布し、6歳から19歳までの児童生徒が通う小学校及び中学校の教育課程を示した。さらに、翌年には小学教則を改正した。一方で、東京師範学校は明治6年2月に初めて小学教則を出し、その後同年5月と明治7年に2度の改正を行なった。小学校、中学校はともに上等と下等に分かれるため、小学校については下等小学教則と上等小学教則を、中学校についても下等中学教則と上等中学教則を作成したが、文部省は小学校の充実を優先したことや当該期に上等小学や中学まで進学する児童生徒が少なかったことなどを背景に、上等小学教則や中学教則は、下等小学教則に比べると教授内容や教授方法の記述を簡略化する傾向にあった。そのため、ここでは「学制」成立期において、2つの機関が提示した下等小学教則に焦点をあてて、以下に特徴をまとめる。

文部省は「学制」成立期に2つの下等小学教則を公布した。その教授内容は、近世以来の読み書き算と近代の新しい学問である理科や地理、保健、修身で構成された。教授方法として、教科書の使用のほか、近世以来の基本的な読み書きや藩校や学問塾（漢学塾、洋学塾、国学塾など）などで用いられた素読、輪講という方法を用いながら近代の知識の習得も目指した。一方、東京師範学校では、「学制」成立期に3つの下等小学教則を出した。3つの下等小学教則を対照してわかったことは3点である。1つは、改正を重ねても教科数や教科名は変わらなかったことである。文部省の小学教則と対照すると教科名や教科数に違いはあるものの、実際の教授内容編成は大きく変わるものではなかった。2つに、先行研究では指摘されていないが改正を重ねるにつれて、複数の教科の教

授内容が高度になったことである。「書取」「作文」「問答」など複数の教科において、改正を重ねるうちに教授内容が下位の等級に繰り下がるようになり、結果として児童は当初より高度な内容を学ぶことになった。3つに、改正を重ねるにつれて教授方法を詳細に記すようになったことである。

「算術」「諸科復習」「体操」という教科の教授方法が詳しく説明されるようになり、より充実した内容になってきた。3節で詳しく述べたように、両者の小学教則の大きな違いは教授内容よりもむしろ教授方法にあったと考えられる。文部省及び東京師範学校の小学教則は、各府県の小学教則のモデルとしての役割を有していた。そのため、さまざまな教授方法を各府県に示すことに意味があった。文部省は主に近世以来の教授方法を提示し、東京師範学校は主にアメリカの小学校から導入した教授方法を提示した。このように2つの機関が提示した小学教則のうちどちらを各府県は選び、活用していくのか。その選択は、どのような地域の事情や教育観に基づくのか。本稿で整理した文部省と東京師範学校の教育課程の特徴を念頭に置きながら、今後は「学制」成立期における地域の小学教則を発掘し、作成過程から編成のあり方について、分析と考察を進めたい。

註

- 1) 花井信『山峡の学校史』川島書店、2011年、第一部「山峡の学校史」第一章「教員の洋学修業」。
- 2) 松尾由希子・山下廉太郎『「学制」成立期の教員の資質能力—近世・近代移行期における群馬県教員の履歴の分析—』『静岡大学教育研究』10、2014年。
- 3) 主に、原案（文部省学制原案）との異同点、企画過程や教育課程の特徴が考察された。倉沢剛『小学校の歴史I』ジャパンライブラリー、1963年。日本科学史学会編『日本科学技術史体系 第8巻・教育<1>』第一法規出版、1964年、「第五章『学制』と科学の普通教育の制度化」。窪田祥宏「文部省創定小学教則について」『日本の教育史学』第11集、1968年。文部省『学制百年史（記

述編)』帝国地方行政学会、1972年、第一編「近代教育制度の創始と拡充」第一章「近代教育制度の創始」。倉澤剛『学制の研究』講談社、1973年。水原克敏『近代日本カリキュラム政策史研究』風間書房、1994年、第一章「学制期のカリキュラム政策」。など

4) 主に、教育課程の特徴が考察されるとともに原本となるアメリカの教育課程の内容があきらかになった。同上書『小学校の歴史Ⅰ』。同上書『近代日本カリキュラム政策史研究』。同上書『学制百年史(記述編)』。古賀徹「東京師範学校附属小学教則と米国サンフランシスコ公立学校カリキュラムとの比較考察」『教育学雑誌』第28号、1994年。

5) 石川県や滋賀県などの小学教則の特徴があきらかになっている。同上書『小学校の歴史Ⅰ』。畑中誠治「明治初期滋賀県における校則・教則について—滋賀県地方教育史史料研究ノート(1)」『滋賀大学教育学部紀要 教育科学』26、1976年。

木全清博「滋賀県における明治初期の教育史資料(2) —小学校教則(その1)—」『教育研究所紀要』第26号、1993年。

6) 前掲註3)『小学校の歴史Ⅰ』。前掲註3)『学制の研究』。

7) 前掲註3)『近代日本カリキュラム政策史研究』、86頁。前掲註3)『日本科学技術史体系 第8巻・教育<1>』(202~203頁)でも同様に、文部省の小学教則で、藩校や私塾や手習塾などで用いられた伝統的な読方・輪講・口授という教授方法を教科として名づけたことを指摘し、その理由は「急進的な内容」を当該期の日本の現実に合わせることにあったと述べるが、それ以上の深い言及はみられない。

8) 『文部省布達全書 明治四年、明治五年』(国立国会図書館所蔵、請求番号:CZ-611-07)中の「中学教則略并小学教則頒布ノ事」。デジタルアーカイブにて閲覧。

9) 『文部省布達全書 明治六年』(国立国会図書館所蔵、請求番号:CZ-611-07)中の「第七十六号 小学教則改正頒布ノ事」デジタルアーカイブにて閲覧。

10) 「自明治六年二月至同七年一月 附属小学教則」筑波大学附属図書館所蔵、文書番号:ホ200/50。

11) ただし、「当分欠ク」と記される。

12) 前田勉『江戸の読書会—会読の思想史』平凡社、2012年、46頁。

13) 窪田祥宏氏の教科書の分析(前掲註3)「文部省創定小学教則について」、46頁)によると、「読本読方」「読本輪講」の教科書である『啓蒙智恵の環』『窮理問答』『物理訓蒙』『天変地異』『道理図解』などは、「理科的啓蒙書」であった。また、『日本科学技術史体系』(前掲註3)、201頁)によると「書牘」の教科書である『窮理捷徑十二月帖』は理科に関する問答を中心とした手紙文だった。

14) ただし、近世でも藩校や学問塾(漢学塾、国学塾、洋学塾)、郷学などで講釈という一斉教授も行なわれていた。前田勉氏などの研究成果(前掲註12)、41~45頁)に詳しい。

15) 前掲註3)『学制の研究』、685頁。

16) ただし、「当分欠ク」と記される。

17) 向野康江氏(『『学制』成立期における野画の意味/野画は美術教育の教科名か?』『美術教育学:美術科教育学会誌』20、1999年、111頁。)は「野画」を地図作成のプロセスを学ぶ教科であるとした。

18) 前掲註12)、340頁。

19) 同上書、46頁。

20) ただし、全ての等級で減少したわけではない。

21) 前掲註3)『学制百年史(記述篇)』、206頁。

22) 『文部省第一年報(明治六年)』宣文堂書店、1964年、149頁。

23) 『文部省第二年報(明治七年)』宣文堂書店、1964年、1頁。

24) 『文部省第五年報(明治十年)』宣文堂書店、1965年、15頁。

25) 前掲註22)、149~150頁。

26) 前掲註4)「東京師範学校附属小学教則と米国サンフランシスコ公立学校カリキュラムとの比較考察」、193頁。前掲註3)『日本科学技術史体系』、203頁。

27) 前掲註 4)「東京師範学校附属小学教則と米国サンフランシスコ公立学校カリキュラムとの比較考察」、192 頁。前掲註 3)『日本科学技術史体系』、204 頁。

28) 前掲註 5)「滋賀県における明治初期の教育史資料 (2)」、79 頁。

29) 同上論文、82 頁。

30) 片桐芳雄氏(「明治初期における公立小学教則の研究—岡山県を対象として—」『愛知教育大学研究報告』31(教育科学)、1982年、55頁)は「前年まで『堅く遵奉』しようとしていた文部省教則を、いわゆる師範学校式教則にあらためたのではなかろうか」と推測している。

31) 前掲註 3)『日本科学技術史体系』、204 頁。

32) 前掲註 3)『学制の研究』、687 頁。『学制百年史』(前掲註 3)、179 頁)では「小学校の教育課程をわが国の実情に即して編成するには、机上の計画では不相当であることが明らかであった。そこで、明治五年五月東京に創設された直轄の師範学校において、新しい小学教則の編成を行なわせることとなったのである。」と述べられている。

33) 前掲註 3)『小学校の歴史 I』、761 頁。

34) 前掲註 8)。

35) 前掲註 24)、1 頁。

36)『日本科学技術史体系』(前掲註 3)、200~201 頁)によると、教科書の内容や教科別配当時間を検討した結果、文部省の小学教則は「数学・科学・技術教育」中心の内容であった。

37) 例えば、同上書(228~234 頁)に掲載されている第 5 級の『小学読本』(巻 4)をみると、月食・日食の仕組みや地球と星の仕組み、図形など理科や算術の内容である。

38) 明治 6 年 2 月の小学教則の「作文」第 3 級にはあったが、明治 6 年 5 月の小学教則で削除された。

39) 「問答」について、倉澤剛氏(前掲註 3)『学制の研究』、700 頁)は「師範学校案の中核となり、これが全国の小学校に異様な波紋をなげかけるのである。」と述べる。

40) 前掲註 3)『学制の研究』700~701 頁。前掲

註 4)「東京師範学校附属小学教則と米国サンフランシスコ公立学校カリキュラムとの比較考察」198~199 頁。

41) 同上書『学制の研究』、688~689 頁。倉澤氏は明治 6 年の文部省の小学教則と明治 6 年 5 月の東京師範学校の小学教則を対照した。一方で、本稿は、東京師範学校の小学教則については明治 7 年 1 月の小学教則を分析対象にしている。東京師範学校の明治 6 年 5 年と明治 7 年 1 月の小学教則を比較すると、いくつかの教科における学習内容が高度になったという点以外に大きな変更はなかったため、倉澤氏の評価に対して考察を付け加えることとした。

42) 前田勉氏(前掲註 12)、37 頁)は、素読について「漢文の意味内容を解釈せずに、ただ声をあげて、文字のみを読み習い、暗誦することをめざした。具体的には、先生が一人一人の生徒の前で、一人一人の進み具合に応じて、テキストの漢字一字一字を『字突き棒』で指しながら、ゆっくり読み、生徒はそれを復誦する。次の回までに、今日の分を暗誦してきて、先生の前で、スラスラ誤りなく読むことができれば、先に進むことができる。」と説明する。

43) 同上書、41 頁。

44) 前掲註 3)『日本科学技術史体系』、201 頁。

【付記】

本研究は、学術研究助成基金助成金(若手研究(B))「近世・近代移行期の職業転換にみる近世の学問の意義と展開」(課題番号 23730740)の助成を受けたものである。

表1 明治5年の文部省の下の小学教則

	第8級	教科書	第7級	教科書	第6級	教科書	第5級	教科書	第4級	教科書	第3級	教科書	第2級	教科書	第1級	教科書
綴字	週6時 <教授方法> 生徒を順に並ばせ、右の教科書を使って、教師が盤上に書き、教える。 前日に学んだ分は、生徒間で確認、修正させる。	『智恵の糸口』 『うひまなひ』 『輸入智恵の環』 巻1	週6時 <教授内容> 五十音四段の活用 字音かなづかいなど <教授方法> 前級と同じ													
習字	週6時 <教授内容> 平仮名、片仮名、数字、西洋数字 字形、運筆を主に教える。訓読を教える必要はない。 <教授方法> 教科書などを使って、平仮名、片仮名、数字、西洋数字を教える。 教師は、巡回する。	『学習草紙』 『習字本』 『習字初歩』	週6時 <教授内容> 漢字の楷書 <教授方法> 前級と同じ		週6時 <教授内容> 行書 <教授方法> 前級と同じ		週6時 <教授内容> 行書 <教授方法> 前級と同じ		週6時 <教授内容> 楷書と片仮名の交じった文 <教授方法> 字の形はやや小さくなるようにする。		週6時 <教授内容> 行草平仮名交じりの文		週4時 前級と同じ		週2時 前級と同じ	
単語読方	週6時 <教授内容> 右の教科書などの内容 右の教科書などの中の語句の読み及び意味 <教授方法> 右の教科書などの語を盤上に記し、教師が訓読を高唱した後に生徒に唱えさせる。 その後、意味を教える。 日々、前日の分は暗誦させる。	『童蒙必読』単語篇	週4時 <教授方法> 前級と同じ		『地方往来』 『農家往来』 『世界商売往来』											
洋法算術、算術	週6時 洋法算術 <教授内容> 西洋数字 数位、加法算、九九 筆算と暗算(加減算) <教授方法> 右の教科書などを使って、教師は西洋数字、数位、加法算、九九の声を盤上に記し、生徒に紙上に写し取らせる。 加減の算法については、まず方法を教え、盤上には題のみを出す。 筆算と暗算は隔日で練習させる。 前日の分は、全て盤上に記して生徒一同に声を出して読ませる。	『筆算訓蒙』 『洋算早学』	週6時 算術 <教授内容> 乗除算 筆算と暗算 <教授内容> 乗除算の方法は、前級と同じ。 筆算と暗算は隔日で練習させる。		週6時 算術 <教授内容> 乗除算		週4時 算術 <教授内容> 四則応用 筆算と暗算 <教授方法> 筆算と暗算は隔日で行なう。		週6時 算術 <教授内容> 加減乗除法		週6時 算術 <教授内容> 分計算		週6時 算術 <教授内容> 分計算		週6時 算術 <教授内容> 分数 比例算	
修身口授	週2時 <授業方法> 右の教科書などを使って、教師の口から説諭する。	『民家童蒙解』 『民家童蒙教草』	週2時 前級と同じ		週2時 <教授方法> 右の教科書などを使って、前級と同じように講述する。		『勸善訓蒙』 『修身論』		週1時 <内容> 右の教科書などの大意 <授業方法> 右の教科書などの大意を講授する。	『性法路』						
単語読誦	週4時 <教授方法> 一人ずつ直立し、前日に学んだ部分を暗誦させる。 盤上に記させる。		週4時 前級と同じ													
会話読方			週4時 <教授方法> 教科書を使って、教える。『単語篇』の方法と同じ。	『童蒙必読』 会話篇	週6時 前級と同じ											
単語書取					週4時 <教授方法> 教師は単語を口に出して読み、生徒に聞き書きさせる。生徒が書き終わると、教師は盤上に記し、生徒に答えを確認させ、修正させる。			週2時 前級と同じ								
読本読方					週6時 右の教科書などを使って、一句読ずつ教え、生徒一同教師の後に続いて読む。	『西洋衣食住学』 『学問のすずめ』 『啓蒙智慧の環』		週4時 <教授内容> 前級のほか、右の教科書などの内容		『西洋夜話』 『道理問答』 『物理訓蒙』 『天変地異』						

	第8級	教科書	第7級	教科書	第6級	教科書	第5級	教科書	第4級	教科書	第3級	教科書	第2級	教科書	第1級	教科書
会話講義							週4時 ＜教授方法＞ ・前に学んだところを、一人ずつ場所を変えて暗誦させる。 ・学んでいないところは、独見させてきて、暗誦させる。									
地学読方							週2時 ＜教授内容＞ ・右の教科書を教える。 ＜教授方法＞ ・読本読方と同じようにする。	『日本国尽』	週6時 ＜教授内容＞ ・右の教科書を教える。	『世界国尽』						
養生口授							週2時 ＜教授方法＞ ・右の教科書などを使って、教師が口述する。	『養生法』 『健全学』	週2時 前級と同じ		週2時 前級と同じ					
会話書取									週4時 ＜教授方法＞ ・単語と同じようにする。							
読本輪講									週6時 ＜教授方法＞ ・すでに学んだところを暗誦してきて、一人ずつ直立し、場所を変えてその意味を講述させる。		週6時 前級と同じ		週6時 ＜教授方法＞ ・右の教科書などを教え、講述させる。	『道理図解』 『西洋新書』	週4時 前級と同じ	
文法									当分欠く ＜教授内容＞ ・教科書を用いた語の種類や名詞の諸変化 ＜教授方法＞ ・暗誦を主にする。		当分欠く ＜教授内容＞ ・後詞、挿詞、代詞などの諸変化 ＜教授方法＞ ・各科読方と同じようにする。		当分欠く ＜教授内容＞ ・挿詞の活用変化		当分欠く ＜教授内容＞ ・接詞、前詞、数詞などの活用	
地学輪講											週6時 ＜教授内容＞ ・右の教科書 ・日本地図の使い方 ＜教授方法＞ ・読本輪講と同様に、右の教科書を講述させる。	『日本国尽』	週6時 ＜教授内容＞ ・右の教科書の内容 ・世界地図の使い方 ＜教授方法＞ ・すでに学んだ右の教科書の部分について、順次講述させる。 ・ともに世界地図の用い方を示す。	『世界国尽』	週4時 ＜教授内容＞ ・前巻、右の教科書などを使った世界地図の用法 ＜教授方法＞ ・前巻、右の教科書などを使って、世界地図の用法を講述させる。	・前巻 『世界国尽』 『地理事始』
理学輪講											週2時 ・右の教科書など ＜教授方法＞ ・右の教科書などの書を教え、講述させる。	『窮理図解』	週4時 前級と同じ		週6時 前級と同じ	
書検											週2時 ＜教授方法＞ ・右の教科書などを用いて、かんたんな日用文を数上に記して、講解し、生徒に写させる。	『啓蒙手習本』 『窮理埤後十二月帖』	週4時 前級と同じ		週6時 ＜教授内容＞ ・日用文 ・諸証文など	
各科温習															週2時 ＜教授方法＞ ・これまで学んだところをあげて、復習させる。	

「中学教則略井小学教則頒布」より作成

註
1「教授内容」及び「教授内容」中に用いた単語は、できるだけ資料の通りに記した。
2「洋法算術、算術」は、等級によって科目名が異なるため、等級の＜教授内容＞＜教授方法＞の上に、教科名を記した。

表2 明治6年5月の文部省の下の小学教則

	第8級	教科書	第7級	教科書	第6級	教科書	第5級	教科書	第4級	教科書	第3級	教科書	第2級	教科書	第1級	教科書
綴字	週4時 <教授方法> ・生徒を順に並ばせ、右の教科書を使って教師が盤上に書き、教える。 ・前日に教えた分は、生徒間で確認、修正させる。	『智恵の糸口』 『うひまなび』 『怪入智恵の環』 巻1	週4時 <教授内容> ・五十音四段の活用 ・字音かなづかいなど <教授方法> 前級と同じ													
習字	週6時 <教授内容> ・右の教科書を使って、平仮名や片仮名、数字、西洋数字を教える。 ・字形、運筆を主に教える。訓練を教える必要はない。 <授業方法> ・教師は、巡回する。 ・右の教科書を使う。	『手習草紙』 『習字初歩』	週4時 <教授内容> ・漢字の楷書 <教授方法> ・前級と同じ		週4時 <教授内容> ・行書 <教授方法> 前級と同じ		週4時 <教授内容> ・行書 <教授方法> 前級と同じ		週4時 <教授内容> ・楷書と片仮名の交じった文 <教授方法> ・字の形はやや小さくなるようにする。		週4時 <教授内容> ・行草平仮名交じりの文		週4時 前級と同じ		週2時 ・前級と同じ	
単語読方	週4時 <教授内容> ・右の教科書などの内容 ・右の教科書などの中の語句の読み及び意味 <教授方法> ・右の教科書などの内容とその語を盤上に記し、教師が訓練を高唱した後に、生徒に声に出して読ませる。 ・その後、意味を教える。 ・日々、前日の分は暗誦させる。	『童蒙必読』単語篇	週2時 <教授方法> 右の教科書などを、前級と同じように教える。		『地方往来』 『農業往来』 『世界商売往来』											
算術	週4時 洋法を主とする。 <教授内容> ・右の教科書などを使った、西洋数学、数位、加減算、九九 ・筆算と暗算(加減算) <教授方法> ・右の教科書などを使って、教師は授業内容を盤上に記し、生徒に紙上に写し取らせる。 ・加減の算法については、まず方法を教え、盤上には題のみを出す。 ・筆算と暗算は隔日で練習させる。 ・前日の分は、全て盤上に記して生徒一同に読ませる。	『筆算訓蒙』 『洋算早学』	週4時 <教授内容> ・乗除算 <教授内容> ・乗除算の方法は、前級と同じようにする。 ・筆算と暗算は隔日で練習させる。		週4時 <教授内容> ・乗除算		週4時 <教授内容> ・四則応用 ・筆算と暗算 <教授方法> ・筆算と暗算は隔日で行なう。		週4時 <教授内容> ・加減乗除法		週4時 <教授内容> ・分数算		週4時 <教授内容> ・分数算		週4時 <教授内容> ・分数 ・比例算	
修身口授	週1時 <教授方法> ・右の教科書などを使って、教師の口から説諭する。	『童蒙教草』 『童蒙解』	週1時 前級と同じ		週2時 <教授方法> ・右の教科書などを使って、前級と同じように講述する。 ・前級と同じようにする。		週1時 <教授内容> ・教科書などの大意 <教授方法> ・右の教科書などの大意を講述する。			『勤善訓蒙』 『修身論』						
単語誦讀	週2時 <教授方法> ・一人ずつ直立し、前日に学んだ部分を暗誦させる。 ・盤上に記させる。		週2時 前級と同じ													
会話読方			週2時 <教授方法> ・右の教科書を使って、教える。単語篇の方法と同じ。		『童蒙必読』 会話篇		週4時 前級と同じ									
国体学口授	週1時 <教授方法> ・右の教科書などを使って、教師から説示する。	『国体訓蒙』	週1時 前級と同じ													
単語読取					週2時 <教授方法> ・教師は単語を声に出して読み、生徒に聞き書きさせる。生徒が書き終わると、教師は盤上に記し、答えを確認し、修正などをさせる。		週2時 前級と同じ									

	第8級	教科書	第7級	教科書	第6級	教科書	第5級	教科書	第4級	教科書	第3級	教科書	第2級	教科書	第1級	教科書	
読本読方					週4時 ＜教授方法＞ ・右の教科書などを用いて、一句読ずつ教え、生徒一同教師の後に続いて読む。	『西洋衣食住』 『学問のすすめ』 『路家智慧の環』	週2時 ＜教授内容＞ ・前級のほか、右の教科書などの内容	『西洋夜話』 『窮理問答』 『物理訓解』 『天変地異』									
会話読誦							週4時 ＜教授方法＞ ・前に学んだところを、一人ずつ場所を変えて暗誦させる。 ・学んでいないところは、独見させてきて、暗誦させる。										
地理読方							週2時 ＜教授内容＞ ・右の教科書を教える。 ＜教授方法＞ ・読本読方と同じようにする。	『日本国尽』	週4時 ＜教授内容＞ ・右の教科書の内容	『世界国尽』							
養生口授							週1時 ＜教授方法＞ ・右の教科書などを用いて、教師が口述する。	『養生法』 『健全学』	週2時 前級と同じ		週2時 前級と同じ						
会話読取									週2時 ＜教授内容＞ ・単語書取と同じようにする。								
読本輪講									週4時 ＜教授方法＞ ・すでに学んだところを暗誦してきて、一人ずつ直立し、場所を変えてその意味を講述させる。		週4時 前級と同じ		週4時 ＜教授方法＞ ・右の教科書などを教え、講述させる。	『道理図解』 『西洋新書』	週2時 前級と同じ		
文法							当分欠く ＜教授内容＞ ・教科書を用いた詞の種類や名詞の語変化 ＜教授方法＞ ・暗誦を主にする。		当分欠く ＜教授内容＞ ・後詞、構詞、代詞などの語変化 ＜教授方法＞ ・各科読方と同じようにする。			当分欠く ＜教授内容＞ ・動詞の活用変化			当分欠く ＜教授内容＞ ・接詞、副詞、数詞などの活用		
地理輪講									週4時 ＜教授内容＞ ・右の教科書の内容 ・日本地図の使い方 ＜教授方法＞ ・読本輪講と同様に、右の教科書を講述させる。	『日本国尽』		週4時 ＜教授内容＞ ・右の教科書の内容 ・世界地図の使い方 ＜教授方法＞ ・すでに学んだ右の教科書を順次講述させる。 ともに世界地図の用い方を示す。	『世界国尽』	週2時 ＜教授内容＞ ・前書や右の教科書などを使った世界地図の用法 ＜教授方法＞ ・右の教科書などを使って、世界地図の用法を講述させる。	『前書』 『世界国尽』 『地理事始』		
物理輪講									週1時 ＜教授内容＞ ・右の教科書などの内容 ＜教授方法＞ ・右の教科書などを教え、講述させる。	『窮理図解』		週2時 前級と同じ			週4時 前級と同じ		
書讀									週1時 ＜教授方法＞ ・右の教科書などを用いて、かんたんな日本文を盤上に記して、講解し、生徒に写させる。	『啓蒙手習本』 『窮理捷徑十二月帖』		週2時 前級と同じ			週4時 ＜教授内容＞ ・日用文 ・語証文など		
各科温習															週2時 ＜教授方法＞ ・これまで学んだところをあげて、復習させる。		

「小学教則改正頒布ノ事」より作成

註
1「教授内容」及び「教授内容」中に用いた単語は、できるだけ資料の通りに記した。

表3 明治5年の文部省の上等小学教則

	第8級	教科書類	第7級	教科書類	第6級	教科書類	第5級	教科書類	第4級	教科書類	第3級	教科書類	第2級	教科書類	第1級	教科書類
細字習字	週2時 <教授内容> ・行書平仮名交じりの文 ・書簡用の文 <教授方法> ・字を小さくさせる。		週2時 ・前級と同じ													
算術	週6時 <教授内容> ・比例算		週6時 <教授内容> ・比例算		週6時 <教授内容> ・差分算		週6時 <教授内容> ・差分算		週6時 <教授内容> ・差分算		週6時 <教授内容> ・累乗開法の大略		週6時 <教授内容> ・利息算		週6時 <教授内容> ・連級 ・対数用法	
読本輪講	週4時 <教授方法> ・右の教科書などを独見させてきて、輪講口述させる。	『西洋事情』														
理学輪講	週6時 <教授方法> ・右の教科書などを独見させてきて、輪講させる。 ・教師はいっしょに器械を使って、理論を実にする。	・『博物新編訳解』 ・『博物新編訳解補遺』 ・『格物入門和解』 ・『気海観測廣義』 ・器械	週6時 前級と同じ		週6時 前級と同じ		週4時 前級と同じ		週2時 前級と同じ		週2時 前級と同じ		週2時 前級と同じ		週2時 前級と同じ	
文法	当分欠く <教授内容> ・作文の活用		当分欠く 前級と同じ		当分欠く 前級と同じ		当分欠く 前級と同じ		当分欠く 前級と同じ		当分欠く 前級と同じ		当分欠く 前級と同じ		当分欠く 前級と同じ	
書讀、書讀作文	書讀作文 週6時 <教授方法> ・短いかんたんな日用文を作らせる。		書讀作文 週6時 前級と同じ		書讀作文 週6時 前級と同じ		書讀 週4時 <教授内容> ・右の教科書を用いた公用文 <教授方法> ・日用文の方法と同じようにする。	『日誌類』	書讀 週4時 前級と同じ		書讀作文 週4時 <教授内容> ・公用文 <教授方法> ・公用文を作らせる。		書讀作文 週3時 前級と同じ			
地学輪講	週6時 <教授方法> ・右の教科書を独見させてきて、講述させる。 ・ともに地名を記させる地図をおいて、その地名を口に出して読み、その箇所を指示させる。	・『皇國地理書』 ・地図	週6時 <教授方法> ・右の教科書を用いて、前級と同じようにする。 ・いっしょに地球儀を用いる。	『輿地誌』 ・地球儀	週4時 前級と同じ		週2時 前級と同じ		週2時 前級と同じ		週2時 前級と同じ		週2時 前級と同じ		週2時 前級と同じ	
史学輪講			週4時 <教授方法> ・右の教科書などを独見させ、輪講させる。	『王代一覽』	週4時 <教授方法> ・右の教科書などを独見させてきて、解説させる。	『国史略』	週6時 前級と同じ		週4時 <教授方法> ・右の教科書の類を使って、独見輪講させる。前級と同じように行なう。	『万国史略』	週2時 <教授方法> ・右の教科書などを使って、独見輪講させる。前級と同じように行なう。	『五洲紀事』	週2時 前級と同じ		週2時 前級と同じ	
細字速写					週2時 <教授内容> ・楷書片仮名交じりの文、行書平仮名の文、手簡文 <教授方法> ・上記の教授内容の手本を置いて、速やかに書かせる。 ・字形、運筆をきめこまやかにして、外にはみ出さないようにする。		週2時 前級と同じ <教授方法> ・手本を用いて、その文を教師が口述する。		週2時 前級と同じ		週2時 前級と同じ		週2時 前級と同じ		週2時 前級と同じ	

	第8級	教科書類	第7級	教科書類	第6級	教科書類	第5級	教科書類	第4級	教科書類	第3級	教科書類	第2級	教科書類	第1級	教科書類
野画					週2時 ＜教授内容＞ ・右の教科書を用いた点線正形の類 ＜教授方法＞ ・習字の方法と同じ	・『南校板野画本』	週2時 ＜教授内容＞ ・机案の類 ＜教授方法＞ ・机案の類を画かせる。 ・前級と同じ		週2時 ＜教授内容＞ ・右の教科書などを用いた平面直線体 ＜教授方法＞ ・右の教科書などを使って、平面直線体の類を画かせる。	・『西面指南』	週1時 ＜教授内容＞ ・平面直線体に陰影あるもの ＜教授方法＞ ・平面直線体に陰影あるものを画かせる。		週3時 ＜教授内容＞ ・弧線体 ＜教授方法＞ ・弧線体を画かせる。		週4時 ＜教授内容＞ ・地図 ・その他種々 ＜教授方法＞ ・地図を画かせる。	
幾何					週4時 ＜教授内容＞ ・右の教科書を用いた正形の類 ＜教授方法＞ ・算前と同じ		・『測地略』 幾何学の部	週4時 ＜教授内容＞ ・諸線角度三角形の類		週4時 ＜教授内容＞ ・円形、多角、平面形の類		週4時 ＜教授内容＞ ・諸形の比較など		週6時 ＜教授内容＞ ・実用法		
博物								週4時 ＜教授方法＞ ・右の教科書を独見輪講させる。	・『博物新編 訳解』家畜の部	週2時 ＜教授方法＞ ・右の教科書を独見講させる。	・『博物新編 訳解』野獣の部	週3時 ＜教授内容＞ ・右の教科書を教える。	・『博物新編 訳解』草木の部	週2時 ＜教授内容＞ ・右の教科書の内容	・『博物新編 訳解』鳥介の部	
化学										週4時 ＜教授内容＞ ・日用物品の分析配合 ＜教授方法＞ ・右の教科書などを使って、日用物品の分析配合を独見講究させる。 ・教師はいつしよに器械を使って、これを実にする。	・『化学訓蒙』 ・『化学入門』 ・器械	週3時 前級と同じ		週2時 前級と同じ		
生理														週1時 ＜教授方法＞ ・教師の生養を用いて、理を口述する。		
諸科温習														週1時		

「中学教則略并小学教則頒布」より作成

註

1.「教授内容」及び「教授内容」中に用いた単語は、できるだけ資料の通りに記した。

2.「書讀、書讀作文」は、等級によって科目名が異なるため、等級の＜教授内容＞＜教授方法＞の上に、教科名を記した。

表4 明治6年2月の東京師範の二等小学教則

	第9級	教科書類	第7級	教科書類	第6級	教科書類	第5級	教科書類	第4級	教科書類	第3級	教科書類	第2級	教科書類	第1級	教科書類
読物	<p><教授内容> ・「五十音図」と「濁音図」を使った仮名の音と呼ば ・「単語図」第1から第8ま でを使った単語の読方と ・「小学読本」巻1の1,2回 <教授方法> ・右の教科書を使う。</p>	<p>・「五十音図」 ・「濁音図」 ・「単語図」第1～ 第8 ・「小学読本」巻1</p>	<p><教授内容> ・右の教科書の内容</p>	<p>・「連語図」第1 ～第8 ・「小学読本」 巻1</p>	<p><教授内容> ・右の教科書の内容</p>	<p>・「小学読本」 巻2</p>	<p><教授内容> ・右の教科書の内容 <教授方法> ・いっしょに地球儀 を示す。</p>	<p>・「小学読本」 巻3 ・「地理初歩」 ・地球儀</p>	<p><教授内容> ・右の教科書の内容 <教授方法> ・いっしょに日本 地図を示す。</p>	<p>・「小学読本」 巻4 ・「日本地理 書」巻1 ・日本地図</p>	<p><教授内容> ・右の教科書の内容 <教授方法> ・いっしょに日本 地図を示す。</p>	<p>・「小学読本」 巻5 ・「日本地理 書」巻2 ・日本地図</p>	<p><教授内容> ・右の教科書の内容 <教授方法> ・いっしょに日本 地図を示す。</p>	<p>・「小学読本」 巻6 ・「日本地理 書」巻3 ・日本地図</p>	<p><教授内容> ・右の教科書の内容 <教授方法> ・いっしょに万国 地図を示す。</p>	<p>・「小学読本」 巻6 ・「万国地理 書」 ・万国地図</p>
算術	<p><教授内容> ・右の教科書を使った数字 の読み方と1～100まで の書き方、位取り ・物数の教え方 ・加算 ・九九 <教授方法> ・右の教科書を使う(数字 の読み方、1～100までの 書き方、位取り)。 ・算盤を使う(物数の教え 方)。 ・暗誦させる。(加算、九 九)</p>	<p>・「数字図」 ・「算用数字図」 ・算盤</p>	<p><教授内容> ・100～万までの数 ・乗算九九 <教授内容> ・前級と同じ ・100～万までの数 を教える。 ・乗算九九を暗誦 させる。</p>	<p><教授内容> ・加法 <教授方法> ・右の教科書を使 う。</p>	<p>・「小学算術 書」巻1</p>	<p><教授内容> ・減法 <教授方法> ・右の教科書を使 う。</p>	<p>・「小学算術 書」巻2</p>	<p><教授内容> ・乗法 <教授方法> ・右の教科書を使 う。</p>	<p>・「小学算術 書」巻3</p>	<p><教授内容> ・除法 <教授方法> ・右の教科書を使 う。</p>	<p>・「小学算術書」 巻4</p>	<p><教授内容> ・四術合法 <教授方法> ・右の教科書を使 う。</p>	<p>・「小学算術書」 巻5</p>	<p><教授内容> ・分数 <教授方法> ・右の教科書を使 う。</p>	<p>・「小学算術書」 巻6</p>	
習字	<p><教授内容> ・片仮名 ・平仮名 ・筆の持ち方 など <教授方法> ・「習字図」を使って、盤上 へ片仮名の字形を記し、 運筆を教えて石盤へ習わ せる。 ・「習字本」を使う(平仮 名、筆の持ち方など)。</p>	<p>・「習字図」 ・「習字本」</p>	<p><教授内容> ・楷書 <教授方法> ・右の教科書を使 う。</p>	<p>・「習字本」</p>	<p><教授内容> ・楷書 <教授方法> ・右の教科書を使 う。</p>	<p>・「習字本」</p>	<p><教授内容> ・楷書 <教授方法> ・右の教科書を使 う。</p>	<p>・「習字本」</p>	<p><教授内容> ・草書 <教授方法> ・右の教科書を使 う。</p>	<p>・「習字本」</p>	<p><教授内容> ・草書 <教授方法> ・右の教科書を使 う。</p>	<p>・「習字本」</p>	<p><教授内容> ・草書 <教授方法> ・右の教科書を使 う。</p>	<p>・「習字本」</p>	<p><教授内容> ・草書 <教授方法> ・右の教科書を使 う。</p>	
書取	<p><教授方法> ・五十音、単語の文字を 仮名で綴らせる。</p>		<p><教授方法> ・前級と同じよう に、 単語を仮名で綴ら せる。</p>	<p><教授方法> ・単語中のかんた んな文字を書き取 らせる。</p>	<p><教授方法> ・単語を書き取ら せる。</p>	<p><教授方法> ・右の教科書の中 の短い句を書 き取らせる。</p>	<p>・「小学読本」</p>	<p><教授方法> ・右の教科書の中 の句を書き取ら せる。</p>	<p>・「小学読本」</p>							
問答	<p><教授内容> ・味わい、食べ方、「器材」 を組み立てる物質、用い 方など <教授方法> ・右の教科書を使って、問 答する。</p>	<p>・「単語図」</p>	<p><教授方法> ・人体の部分、通 常物、色の図を 使って、問答する。</p>	<p>・「色の図」</p>	<p><教授方法> ・「形体線度」と「果 物図」を使って、問 答する。</p>	<p>・「形体線度」 ・「果物図」</p>	<p><教授方法> ・花鳥獸魚と蟲の 図を使って、問答す る。</p>	<p>・「花鳥獸魚と 蟲の図」</p>	<p><教授方法> ・右の教科書と 地球儀を使っ て、問答する。</p>	<p>・「地理初歩」</p>	<p><教授方法> ・右の教科書と日 本地図を使っ て、問答する。</p>	<p>・「日本地理 書」 ・日本地図</p>	<p><教授方法> ・右の教科書と日 本地図を使い、 問答する。</p>	<p>・「日本地理 書」 ・日本地図</p>	<p><教授方法> ・右の教科書と 万国地図と暗射 地図などを使 い、問答する。</p>	<p>・「万国地理 書」 ・「万国地図」 ・「暗射地図」</p>
作文											<p><教授方法> ・単語中の1,2字を 題に与えて、1句 綴らせる。ただし、 前日に題を与え て、翌日に書か せる。以下、同 じ。</p>		<p><教授方法> ・1句の題を与え て、2,3句綴ら せる。</p>		<p><教授方法> ・手紙の文を綴ら せる。</p>	
諸科復習																
復読																
体操																

「自明治六年二月至同七年一月附属小学教則」より作成

註
1.「教授内容」及び「教授内容」中に用いた単語は、できるだけ資料の通りに記した。
2.教科が等級に置かれていない時は欄に斜線を引き、教科として置かれているものの「教授内容」などが記されない時は空欄のままとした。

表5 明治6年5月の東京師範学校の下等小学教則

	第8級	教科書類	第7級	教科書類	第6級	教科書類	第5級	教科書類	第4級	教科書類	第3級	教科書類	第2級	教科書類	第1級	教科書類
読物	<教授内容> ・「五十音図」と「濁音図」を使った仮名の音と呼ば ・「単語図」第1から第8までと「連語図」第1から第8までの内容 ・「小学読本」巻1の12回 <教授方法> ・右の教科書を使う。	・「五十音図」 ・「濁音図」 ・「単語図」第1～第8 ・「連語図」第1～第8 ・「小学読本」巻1	<教授内容> ・右の教科書の内容	・『小学読本』巻1、2	<教授内容> ・右の教科書の内容 <教授方法> ・いっしょに地球儀を示す。	・『小学読本』巻3 ・『地理初歩』 ・地球儀	<教授内容> ・右の教科書の内容 <教授方法> ・いっしょに地図を示す。	・『小学読本』巻4 ・『日本地誌』巻1 ・地図	<教授内容> ・右の教科書の内容 <教授方法> ・いっしょに地図を示す。	・『小学読本』巻5 ・『日本地理書』巻2 ・地図	<教授内容> ・右の教科書の内容 <教授方法> ・いっしょに地図を示す。	・『日本史書』巻1 ・『万国地誌』巻1 ・地図	<教授内容> ・右の教科書の内容 <教授方法> ・いっしょに地図を示す。	・『日本史書』巻2 ・『万国地誌』巻2 ・地図	<教授内容> ・右の教科書の内容	・『万国地誌』巻3 ・『万国史書』巻1、2 ・万国地図
算術	<教授内容> ・右の教科書を使った数字の読み方と1～100までの書き方、位取り ・物数の数え方 ・加算 ・九九 <教授方法> ・算用数字を使う ・右の教科書を使う(数字の読み方、1～100までの書き方、位取り) ・算盤を使う(物数の数え方) ・暗算させる。(加算、九九)	・「数字図」 ・「算用数字図」 ・算盤	<教授内容> ・100～万までの数 ・乗算九九 ・羅馬数字 <教授内容> ・前級と同じ ・乗算九九を暗算させる。		<教授内容> ・加算 <教授方法> ・最初は、「小学算術書」を使い、暗算を主とする。以下、同じ。	・『小学算術書』	<教授内容> ・減法 <教授方法> ・右の教科書を使う。 ・暗算を主とする。	・『小学算術書』	<教授内容> ・乗法 <教授方法> ・右の教科書を使う。 ・暗算を主とする。	・『小学算術書』	<教授内容> ・除法 <教授方法> ・右の教科書を使う。 ・暗算を主とする。	・『小学算術書』	<教授内容> ・四術合法 <教授方法> ・右の教科書を使う。 ・暗算を主とする。	・『小学算術書』	<教授内容> ・簡単な分数 <教授方法> ・右の教科書を使う。 ・暗算を主とする。	・『小学算術書』
習字	<教授内容> ・片仮名の字形 ・右の教科書を使った仮名 ・筆の持ち方 など <教授方法> ・右の教科書を使う。 ・右の教科書を使う。	・「習字本」	<教授内容> ・楷書 <教授方法> ・右の教科書を使う。	・『習字本』	<教授内容> ・楷書 <教授方法> ・右の教科書を使う。	・『習字本』	<教授内容> ・楷書 <教授方法> ・右の教科書を使う。	・『習字本』	<教授内容> ・行書		<教授内容> ・草書		<教授内容> ・草書手紙の文		<教授内容> ・草書手紙の文	
書取	<教授方法> ・五十音、単語の文字を仮名で綴らせる。		<教授方法> ・単語を書き取らせる。		<教授方法> ・右の教科書の中の句を書き取らせる。	・『小学読本』										
問答	<教授内容> ・諸物の性質 ・用い方 など <教授方法> ・右の教科書を用いて、問答する。	・「単語図」	<教授方法> ・人体の部分、通常物、色の図を使って、問答する。	・「色の図」	<教授方法> ・「形体線度図」と「地理初歩」、地球儀などを使って、問答する。	・「形体線度図」 ・『地理初歩』 ・地球儀	<教授方法> ・『日本地誌略』、地図、地球儀などを使って、問答する。	・『日本地誌略』 ・地図 ・地球儀	・前級と同じ		<教授方法> ・右の教科書を使って、問答する。	・『日本史書』 ・『日本地誌』	<教授方法> ・右の教科書と「暗射地図」などを使い、問答する。	・『日本史書』 ・『万国地誌』 ・『暗射地図』	<教授方法> ・右の教科書を使い、問答する。	・『万国地誌』 ・『万国史書』 ・「博物図」第1～■
作文							<教授方法> ・単語中の1、2字を題に与えて、1句に綴らせる。 ・1句の題を与えて、2、3句に綴らせる。		前級と同じ		前級と同じ		<教授方法> ・かんたんな手紙の文を綴らせる。		<教授方法> ・かんたんな手紙の文を綴らせる。	
講科復習																<教授方法> ・以前から学んだところをあげて、復習させる。
復読																
体操	<教授方法> ・「体操図」を使う。	・「体操図」	<教授方法> ・「体操図」を使う。	・「体操図」	<教授方法> ・「体操図」を使う。	・「体操図」	<教授方法> ・「体操図」を使う。	・「体操図」	<教授方法> ・「体操図」を使う。	・「体操図」	<教授方法> ・「体操図」を使う。	・「体操図」	<教授方法> ・「体操図」を使う。	・「体操図」	<教授方法> ・「体操図」を使う。	・「体操図」

「自明治六年二月至同七年一月附属小学教則」より作成

註
1「教授内容」及び「教授内容」中に用いた単語は、できるだけ資料の通りに記した。
2教科が等級に置かれていない時は欄に斜線を引き、教科として置かれているものの「教授内容」などが記されない時は空欄のままとした。

表6 明治7年1月の東京師範学校の下等小学教則

	第8級	教科書類	第7級	教科書類	第6級	教科書類	第5級	教科書類	第4級	教科書類	第3級	教科書類	第2級	教科書類	第1級	教科書類	
読物	<p><教授内容> ・五十音図と濁音図を使った仮名の音と呼ば ・単語図第1から第8までと連語図第1から第8までを使った単語の読方と名物 ・小学読本巻1の1.2回</p> <p><教授方法> ・右の教科書を使う。</p>	<p>・『五十音図』 ・『濁音図』 ・『単語図』第1～第8 ・『連語図』第1～第8 ・『小学読本』巻1</p>	<p><教授内容> ・右の教科書の内容</p>	<p>・『小学読本』巻1、2</p>	<p><教授内容> ・右の教科書の内容</p> <p><教授方法> ・いっしょに地球儀を示す。</p>	<p>・『小学読本』巻3 ・『地理初歩』 ・地球儀</p>	<p><教授内容> ・右の教科書の内容</p> <p><教授方法> ・いっしょに地図を示す。</p>	<p>・『小学読本』巻4 ・『日本地誌』巻1 ・地図</p>	<p><教授内容> ・右の教科書の内容</p> <p><教授方法> ・いっしょに地図を示す。</p>	<p>・『小学読本』巻5 ・『日本地誌』巻2 ・地図</p>	<p><教授内容> ・右の教科書の内容</p> <p><教授方法> ・いっしょに地図を示す。</p>	<p>・『日本地誌』巻3 ・『日本史畧』巻1 ・地図</p>	<p><教授内容> ・右の教科書の内容</p> <p><教授方法> ・いっしょに地図を示す。</p>	<p>・『万国地誌』巻1 ・『日本史畧』巻2 ・地図</p>	<p><教授内容> ・右の教科書の内容</p>	<p>・『万国地誌』巻2 ・『万国史畧』巻1、2</p>	
算術	<p><教授内容> ・右の教科書を使った数字の読み方と1～100までの書き方、位取り ・物の数の教え方 ・加算 ・九九</p> <p><教授方法> ・右の教科書を使う(読み方、1～100までの書き方、位取り) ・算盤を使う(物の教え方) ・暗算させる。(加算、九九)</p>	<p>・『数字図』 ・『算用数字図』</p>	<p><教授内容> ・100～万までの数 ・乗算九九 ・羅馬数字</p> <p><教授内容> ・前級と同じ ・乗算九九を暗算させる。</p>		<p><教授内容> ・加算 ・乗算九九</p> <p><教授方法> ・最初は、『小学算術書』を使い、暗算を主とする。以下、同じ。</p>	<p>・『小学算術書』</p>	<p><教授内容> ・減法 ・乗法</p> <p><教授方法> ・右の教科書を使う。 ・暗算を主とする。</p>	<p>・『小学算術書』</p>	<p><教授内容> ・乗法</p> <p><教授方法> ・右の教科書を使う。 ・暗算を主とする。</p>	<p>・『小学算術書』</p>	<p><教授内容> ・除法 ・簡単な分数</p> <p><教授方法> ・右の教科書を使う。 ・暗算を主とする。</p>	<p>・『小学算術書』</p>	<p><教授内容> ・簡単な分数 ・分数</p> <p><教授方法> ・右の教科書を使う。 ・暗算を主とする。</p>	<p>・『小学算術書』</p>	<p><教授内容> ・分数 ・乗算九九を暗算させる。</p> <p><教授方法> ・右の教科書を使う。 ・暗算を主とする。</p>	<p>・『小学算術書』</p>	
習字	<p><教授内容> ・片仮名の字形 ・右の教科書を使った仮名 ・筆の持ち方 など</p> <p><教授方法> ・右の教科書を使う。</p>	<p>・『習字本』</p>	<p><教授内容> ・楷書 ・楷書の持ち方 など</p> <p><教授方法> ・右の教科書を使う。</p>	<p>・『習字本』</p>	<p><教授内容> ・楷書</p> <p><教授方法> ・右の教科書を使う。</p>	<p>・『習字本』</p>	<p><教授内容> ・楷書 ・楷書の持ち方 など</p> <p><教授方法> ・右の教科書を使う。</p>	<p>・『習字本』</p>	<p><教授内容> ・行書</p>		<p><教授内容> ・行書</p>		<p><教授内容> ・草書手紙の文</p>	<p>・『習字本』</p>	<p><教授内容> ・行書</p>	<p><教授内容> ・草書手紙の文</p>	<p>・『習字本』</p>
書取	<p><教授方法> ・五十音、単語の文字を仮名で綴らせる。</p>		<p><教授方法> ・単語を書き取らせる。</p>		<p><教授方法> ・右の教科書の中の句を書き取らせる。</p>	<p>・『小学読本』</p>											
問答	<p><教授内容> ・諸物の性質 ・用い方 など</p> <p><教授方法> ・右の教科書を用いて、問答する。</p>	<p>・『単語図』</p>	<p><教授方法> ・人体の部分、通常物、色の図を用いて、問答する。</p>	<p>・『色の図』</p>	<p><教授方法> ・『形体線度図』と『地理初歩』、地球儀などを使って、問答する。</p>	<p>・『形体線度図』 ・『地理初歩』 ・地球儀</p>	<p><教授方法> ・右の教科書と地図、地球儀などを使って、問答する。</p>	<p>・『日本地誌』 ・地図 ・地球儀</p>	<p>前級と同じ</p>		<p><教授方法> ・右の教科書を使って、問答する。</p>	<p>・『日本地誌』 ・『日本史畧』</p>	<p><教授方法> ・右の教科書を使い、諸射地図などを使い、問答する。</p>	<p>・『日本史畧』 ・『万国地誌』 ・『諸射地図』</p>	<p><教授方法> ・右の教科書を使い、問答する。</p>	<p>・『万国地誌』 ・『万国史畧』 ・『博物図』第1～</p>	
作文							<p><教授方法> ・単語中の1、2字を題に与えて、1句に綴らせる。 ・1句の題を与えて、2、3句に綴らせる。</p>		<p>前級と同じ</p>		<p>前級と同じ</p>		<p><教授方法> ・かんたんな手紙の文を綴らせる。</p>		<p><教授方法> ・かんたんな手紙の文を綴らせる。</p>		
諸科復習															<p><教授方法> ・以前から学んだところをあげて、復習させる。</p>		
復読																	
体操	<p><教授方法> ・『体操図』を使う。</p>	<p>・『体操図』</p>	<p><教授方法> ・『体操図』を使う。</p>	<p>・『体操図』</p>	<p><教授方法> ・『体操図』を使う。</p>	<p>・『体操図』</p>	<p><教授方法> ・『体操図』を使う。</p>	<p>・『体操図』</p>	<p><教授方法> ・『体操図』を使う。</p>	<p>・『体操図』</p>	<p><教授方法> ・『体操図』を使う。</p>	<p>・『体操図』</p>	<p><教授方法> ・『体操図』を使う。</p>	<p>・『体操図』</p>	<p><教授方法> ・『体操図』を使う。</p>	<p>・『体操図』</p>	

「自明治六年二月至同七年一月附属小学教則」より作成

註
1.「教授内容」及び「教授内容」中に用いた単語は、できるだけ資料の通りに記した。
2.教科が等級に置かれていない時は欄に斜線を引き、教科として置かれているものの「教授内容」などが記されない時は空欄のままとした。

表7 明治6年5月の東京師範学校の上等小学教則

	第8級	教科書類	第7級	教科書類	第6級	教科書類	第5級	教科書類	第4級	教科書類	第3級	教科書類	第2級	教科書類	第1級	教科書類
読物	週6時 <教授内容> ・右の教科書の内容	・『文法書』巻1 ・『日本地理書』巻8	週6時 <教授内容> ・右の教科書の内容	・『文法書』巻2 ・『日本地理書』巻3、4	週6時 <教授内容> ・右の教科書の内容	・『日本地理書』巻5 ・『万国地理書』巻1、2	週6時 <教授内容> ・右の教科書の内容	・『万国地理書』巻3、4 ・『修身談』巻1	週6時 <教授内容> ・右の教科書の内容	・『修身談』巻2 ・『日本書史』巻1、2、3	週6時 <教授内容> ・右の教科書の内容	・『修身談』巻3 ・『日本書史』巻4、5 ・『万国書史』巻1、2	週6時 <教授内容> ・右の教科書の内容	・『万国書史』巻3、4、5 ・『物理階梯』巻1、2	週6時 <教授内容> ・右の教科書の内容	・『物理階梯』巻3 ・『化学説書』 ・『博物誌』巻1、2、3 ・『国体論書』
算術	週4時 <教授内容> ・分数		週4時 <教授内容> ・正比例		週4時 <教授内容> ・鍵比例 ・合率比例		週4時 <教授内容> ・按分遞折比例		週4時 <教授内容> ・利息算		週4時 <教授内容> ・幾何 ・級数		週4時 <教授内容> ・累乗開法の大畧		週4時 <教授内容> ・開立法 ・対数用法	
習字	週4時 <教授内容> ・細字楷書		週4時 ・前級と同じ		週4時 <教授内容> ・細字草書		週4時 前級と同じ		週4時 <教授方法> ・草書細字を早写させる。 ・ただし、手本を与えないで教師の口述による。							
論議	週2時		週2時		週2時		週2時		週2時		週2時		週2時		週2時 <教授方法> ・譜記を兼ねる。	
語記	週2時		週2時		週2時		週2時		週2時		週2時		週2時			
作文	週2時 <教授方法> ・手紙の文を作らせる。		週2時 <教授方法> ・問題を出して、答えを文で綴らせる。		週2時 前級と同じ		週2時 前級と同じ		週2時 前級と同じ		週2時 前級と同じ		週2時 前級と同じ		週2時 前級と同じ	
書画											週4時 <教授方法> ・点線正形の類を画かせる。		週4時 <教授方法> ・直線、弧線、平面の類を画かせる。			
諸科復習																
体操	・時間は定めませんが、5、6分ずつ1日3度行なう。もつとも教師の裁量に任せる。															

「自明治六年二月至同七年一月附属小学教則」より作成

註

- 1.「教授内容」及び「教授内容」中に用いた単語は、できるだけ資料の通りに記した。
- 2.教科が等級に置かれていない時は欄に斜線を引き、教科として置かれているものの<教授内容>などが記されない時は空欄のままとした。